



女心を
わし掴みに
する 方法

短編小説集

たなかひまわり

女心をわし掴みにする方法

<http://p.booklog.jp/book/90728>

- 1.女心をわし掴みにする方法
- 2.盗聴
- 3.今夜は星が綺麗です
- 4.偽名・尾田
- 5.裏切りの果て
- 6.竜巻
- 7.会いたい人がいるなら会いに行きなさい
- 8.会いたい人がいたって会いに行けない
- 9.二十年目の絆
- 10.携帯電話

著者：たなかひまわり

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tanahima2327/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/90728>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/90728>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ

1.女心をわし掴みにする方法

これまで何度、痛い目に遭ってきたことか。

「田中君がいてくれて良かった！」

とか、

「田中君ってホント頼りになる！」

とか、

「田中君と一緒にいると楽しい！」

と、俺に関わった女の子達は口々にそう言う。

しかも、ものすごく嬉しそうな顔で、腕やら腹にぎゅっと抱き付いてきたりして。

俺のことが好きなのかと思うではないか。

普通そうだろう。好きでもない男に触ったりしないよな。

嫌いな男には絶対に触らないと雑誌に書いてあったし。

だから、ありがたく「好き」って気持ちに応えようとしたんだ。

それなのに。

いざ食事に誘うと「その日は先約があるからごめんなさい」。

マニュアルでもあるのか？

皆、口を揃えて同じことを言うよな。

いつ誘ってもそうだ。

「その日はナントカちゃんと買い物に行くからダメで、そっちの日は実家に顔出さないと怒ら

れちやうから……」

どれだけスケジュールが埋まってんだよ。

芸能人じゃあるまいし。

思わせ振りもいい加減にしてくれ。

純情な男心がボロボロだぜ。

つい昨日のことだ。

逆のパターンは有りな事に気づいてしまった。

成功している奴を見つけてしまったのだ。

やり方はこうだ。

ターゲットを見つけたら、本人ではなく共通の知人達に「あの子が好き」と言いまくる。

「あの子のこういうところがいいんだ」と、本人のいないところで具体的に褒める。

何度も何度も、一年間は言い続ける。

回りまわって本人の耳に届くようにする。

重いと引かれるので、本気と冗談の間くらいのテンションで言う。

その子が俺を意識し始め、態度が軟化してきたら脈ありと踏む。

でも、こちらから告白はしない。

馴れ馴れしい態度も絶対に取らない。

一年経って何も進展がなかったら、別のターゲットに変える。

心変わりがしたような、したわけじゃないような曖昧な態度を取る。

付き合っていた訳ではないので罪はないだろう。

追っかけていたアイドルに飽きて、違うアイドルに乗り換えた程度の話だ。

前の女の子は一方的に好かれることで優越感を抱いていたのに、俺の興味の対象が自分ではなくなったことで焦りを感じ始める。

好きでも何でもなかったはずの俺のことが、気になって仕方がなくなる。

俺を別の女に取られるのが嫌で、居てもたってもいられなくなる。

彼女から告白してくる……。

Winner 俺。

好きだと言われると悪い気はしないという心理と、押してダメなら引いてみるの原理を応用した例だ。

奴はこの方法で何年もの間、美女という美女の心をわし掴みにし、彼女達を思い通りに操っている。

奴は地位も名誉も持っているが、きっとそんなの関係ない。

俺は極貧だが、きっとそれも関係ない。

俺の良さをわかってくれる女性は必ずいる。

俺は土建屋だがきっとどこかに女性はいる。

必ず見つけ出す。

行動あるのみ。

ミッション開始だ。

完

2.盗聴

太田はいつになく苛立っていた。

約束の時間を過ぎていたせいかな。

ホテルの最上階。

私を迎え入れるや否や、太田は部屋の入り口で乱暴に服を脱がせた。

首筋を這う唇を感覚で追いながら、私は嫌な予感に苛まれていた。

テーブルの脇にはジュラルミンケース。

取引の際に使われる太田の私物だ。

何が入っているんだろう……。

視線の先に気づいた太田は、阻むように私をベッドに運ぶ。

見られては困るとでもいうように、私に覆いかぶさった。

乳首を口に含み、執拗に舌で転がす。

保っていた私の理性は途切れ、肌が湿り気を帯びながら震える。

太田は私の大腿に手を置き、徐々に敏感な部分を捉えていく。

私が抑えていた息を多様に漏らすと、太田は潤いに満ちた場所に自分のものを沈めた。

まどろみの中、ドアがロックされた。

太田はドアスコープで相手を確認した後、その人物を中に入れた。

「見られてないだろうな」

「ああ」

その人物は、同じ型のジュラルミンケースを持っていた。

太田の肩越しに、シーツに包まったままの私を見つける。

「摩由美さん、お久しぶりです」

清水だ。太田の部下で彼よりも一回り若い。

乱れた形跡をいち早く見つけ、大きな鼻息を漏らした。

私は清水を一睨みし、立ち上がりざまにシーツをまとって浴室に向かった。

シャワーを浴びている間に太田はいなくなっていた。

その代り、清水がソファでグラスに注いだビールを勢いよく煽っている。

「太田は？」

清水に問うも、私の質問に答えようとしなない。

「軽く扱われたもんだな」

清水は私の腕を掴み、強引に膝に乗せた。

バスローブ姿の私の胸を弄る。

彼とは昔、心を通わせたこともある仲だった。

「どういう意味よ」

私は清水のグラスを取り上げる。

「売られたってことだよ。摩由美も俺も」

清水はそう言うと、私を抱き上げてベッドに放り投げた。

持っていたグラスが毛足の長い絨毯に転がる。

「最後の晚餐、楽しむか」

清水は私の両足首を掴み、大きく広げながら顔を埋めた。

静まったばかりの膨らみが、再び疼きだす。

元々生きることに執着を持たない清水だった。

だが、今日はやけに暗い影を漂わせている。

荒げた息遣いから彼の哀傷が伝わり、私は抵抗することが出来ない。

清水は私をうつ伏せにして、背後から何度も突き上げた。

「ねえ、どういうこと？」

ベッドの淵に座り、タバコに火をつけた清水にもう一度訊いた。

「税関を巻き込んで、何回かに分けて薬を密輸したんだ。太田がさっき持ち帰ったケースに薬が入ってる。最後に密輸したのが拳銃で、やらせ押収させるためのもの。税関への見返りってわけね。これから俺がそれを取りに行くんだよ」

「捕まりに行くってこと？」

「そう。出所後に組を一つくれるらしいけど。摩由美は出所前の俺への報酬だっけ。このあと口封じに太田の取引先に売られるんだ」

盗聴でもしていたかのように、説明が終わると同時にノックする音がした。

出所前の報酬を邪魔しないようにするためか。

やられた……。

すべてを悟った私を、スーツを着た数人の男達を取り囲んだ。

大きなキャリーバックが足元に見える。

男の一人が布に浸した薬品を私に嗅がせた。

「何年も先の報酬なんかいらねーよな」

清水が呟く。

遠のいていく意識の向こうで、清水はサイレンサー付き拳銃で自分の心臓を打ち抜いた。

完

3.今夜は星が綺麗です

「知ってる？ 夏目漱石が英語の先生をしている時に、『I Love you』を『月が綺麗ですね』って訳したって。二葉亭四迷は『死んでもいいわ』だよ。それをさ、今でも遠回しに告げる言葉として使う人がいるらしいけど、よっぽど『これから愛してるって言いますよ』って雰囲気醸し出してないと厳しいよね。文学に精通している人同士だったら通じるかもしれないけど、急に『月が綺麗ですね』って言われてもねえ。わかんないわ」

友達の冴子がネットの記事を茶化しながら言った。

確かに、日常生活で普通に夜空を見上げていて、唐突に「月が綺麗だね」と言われても、見たまま「そうだね」と返してしまうだろうし、夏目漱石を知っていても、この瞬間にはきっと「うん、綺麗」としか答えられない。逆に、即座に夏目漱石を思い出し、「ありがとう」などと答えてしまい、相手が単純に月の話をしただけだった赤っ恥もいいところだ。

「うん、伝わらないよね」

そんな言葉のやり取りをする予定がない私は、それ以上夏目漱石に気に留めることはなかった。

ところが、予定は突然やってくる。夜、私が片想いしている相手からメールが届いた。友達付き合いが長すぎて、艶めかしい話に発展しないジレンマの元である彼が、久しぶりにメールを送って来た。

ただ一行、こう記してある。

『今夜は星が綺麗だよ』

月ではなく、星だった。夏目漱石を冴子と語った直後の綺麗シリーズ。この文面通りに受け取るべきか、それとも星と月をアレンジしての愛の告白か。私は得意の即返ができなくなった。

とりあえず夜空を見上げる。街の外灯に邪魔されつつあるが、冬の澄んだ空気を通り抜け、大小たくさんの星が綺麗に瞬いている。

うーん……。

彼は冗談が好きな人だ。愛の告白とまではいかななくても、好意を示したい表れかもしれない。

そうだ、だから月ではなく星なのだ。私が読書好きなのも知っている。決まりではないか。

私はそう結論づけ、どうやって返信するかを考えた。文学的に告られたのだから、文学的に答えたい。かと言って、「ありがとう、死んでもいいわ」と打って、彼が二葉亭四迷まで知らなかったらドン引きされる。「ホントだね、星が綺麗」では芸がない。「そういうことは会ってる時に言って」では、付き合ってもいないのに上から過ぎる。

どうしよう……。

頭を抱えていると、再度メールが来た。

『もうすぐ月食が終わるね』

月だけど、月食。欠けている月……不吉だ。いや、月食が終わるのだから、欠けていたけど復活しようとしている状態か。だから、欠けていた愛が復活しようとしていることを言っているのかもしれない。それとも恋人までいっていないから中途半端という意味の月食で、それが終わるといことは友達からの卒業ということか。そうか、それだ。

私は自己解決して返信に取り掛かる。友達止まりに焦れているのもいい加減飽きた。夏目漱石論を考えあぐねているうちに、どうにでもなれる的な気持ちも湧き上がって来た。伝わるか伝わらないか、的外れか外れてないかは別として、この際だから無難な言葉に精一杯の気持ちを込めて文字を打つ。

『月食が終わったら、月はもっと綺麗になるよ』

完

4.偽名・尾田

ジムで汗を流した帰りのことだった。

雨の中、通りにあるベンチに腰掛けて放心している男がいた。

全身ずぶ濡れになっている。

今日の降りは弱いので、半日くらいそこにいるのかもしれない。

リストラか、失恋か。はたまた借金でも抱えてしまったか。

関わったところで他人の俺が解決できるとは思えない。

困っている人を見るとつい手を差し伸べたくなるが、中途半端に助けて状況を悪化させた過去がある。

相手の為にも良くない。

病気で倒れそうになっている訳でもなさそうだ。

申し訳ない……。

俺は心の中で謝罪し、急いでいる振りをして通り過ぎようとした。

すると、突然後ろから腕をがつつり掴まれた。

驚いて振り返る。ベンチに座っていた男だ。見上げるほどに大きい。

男は物凄い形相で「明日があると思うな」と言った。

「ちょ、ちょっと、放せよ」

振り解こうとするも、手錠の如く手を腕にめり込ませてくる。

「動くな」

男は掴んだ腕を引き寄せ、羽交い絞めしてきた。

「何すんだよ」

必死の抵抗も、本降りになってきた雨にかき消される。

「明日はないんだ」

男は繰り返す。

殺されると思った。

自分がいかに平和ボケしていたかを悟る。

努力と忍耐を積み重ねていけば、明るい将来が待っていると思っていた。

欲しいものはいつか必ずつかみ取ると信じていた。

それなのに、人生は呆気なく幕を閉じる。

人間は数分、いや数秒後の予知もできない。

この事態を予知できていれば、まだ生き延びられたのに。

まだ、やりたいことがあったのに。

この男の言う通りだ。

愚かだった。

「本当だ。明日なんか、ないんだな」

力を抜き、未来を諦めた。

すると、男が言った。

「だから、今この時を大事にするんだ……………それにしてもいい匂い、男の汗の匂いって素敵よね。私も同じジムに通っているのよ。ほら、わかる？ 鍛え上げたこの体」

男は抱き付いたままコートの前をはだけ、いきり立つブツを俺の尻に押し当てた。

完

5.裏切りの果て

二階のドアの隙間から淫靡な叫びが漏れている。

階段の下からでも、乱れた要求がはっきりと聞こえる。

姪の声だ。

誰かに抱かれている。

長期に病を患い、一時退院してきた私を迎えたのはそんな情景だった。

義母が帰宅した。

私の幼い息子と一緒に。

義母はベビーベッドに息子をおろす。

入れ替わりに私は息子を抱き上げた。

ずっしりと重くなった息子を、筋力の衰えた私は支え切ることが出来なくなっていた。

かろうじて落とさなかったものの、大腿に力が入らず床にへたり込む。

息子がぐずり始める。

義母は私に軽蔑した眼を向ける。

私の手から息子を取り上げ、途端に泣き止んだ息子を見て上機嫌になった。

義母はそのまま自分の部屋へ入っていった。

私は再び二階に通じる階段の下に来た。

私達夫婦の寝室も二階にある。

姪の声はしなくなっていた。

一階の騒ぎに気づいたか。

私は念を押す為に、足音を立てながら二階に上がった。

自分の寝室のドアをゆっくりと開ける。

やけに暗い。

違和感に苛まれながら部屋に足を踏み入れる。

私は目を疑った。

家中のタンスが集められ、数個の段ボールが積み上げられている。

まるで物置だ。

部屋の中央にあったはずのダブルベッドもなくなっていた。

「どういうこと？」

私は動転しながら姪がいる部屋に乗り込んだ。

姪は自分の手で口を塞ぎ、声を殺していた。

誰かの上で上体をのけ反らせながら腰を激しく動かしている。

下にいる人物も、姪の動きに合わせてながら繋がった部分を上下に波立たせていた。

二人して私に気づいた。同時に顔をこちらに向ける。

姪の胸を両手で撫でまわしていたのは私の夫だった。

一瞬動きを止めたものの、二人は平然と行為の続きを始めた。

私の存在などなかったかのように悦びを味わい続ける。

それどころか、見られていることを更なる快感に結びつけて絶頂を追い求めている。

異様な光景に、私はただ呆然とするしかなかった。

夫との間で、愛情などとうに消え失せていたことはわかっている。

だが、あんな痴態を見られても罪の意識も感じない程に私を見下していたのか。

ただただ脱力し、怒りさえ湧いてこない。

おぼつかない足どりで一階に降りる。

リビングボードの上に見慣れないフォトフレームがあった。

手に取ってみる。

姪が息子を我が子のように抱き、夫は姪の肩に手を回して頬を寄せ、義母が満面の笑みを浮かべていた。

私は全身の震えが止まらなくなった。

フォトフレームを投げ捨てる。

困惑と恐怖と嫌悪が入り混じり、動悸のする胸を必死で押さえた。

私にはもう帰る場所がない……。

そう思った時、亡くなったはずの両親が私の傍らにやってきた。

「さあ、行こう」

父と母が私に優しく手を差し伸べる。

ほんの少しの戸惑いは、二人の笑顔によりすぐに打ち消された。

私は父と母の間に入った。

温かい眼差しによって、いつも守られていた空間だ。

子どもの頃のように二人の手をしっかりと掴む。

一緒に行きたい。

私の想いは両親とともに白く眩い光に包まれた。

私はようやく安堵した。

完

6.竜巻

友達と四人で車に乗っていた。

私は後部座席。

窓から見える空には、グレーの雲が低く覆っている。

せっかくのドライブなのに……。

少々残念だが、目的は温泉なのでよしとした。

雨が降ったら露天風呂に入らなければいいことだ。

露天が売りの温泉なのだが。

友達は野球の話で盛り上がっている。

無敗神話を作った投手のメジャー入りを巡り、様々な怪情報が流れているとか。

私は単純に、日本からどんどん良い選手がいなくなっちゃうな、と考えていた。

会話に入り切れない中、もう一度空を見た。

遠くに違和感を覚える。

あれ、なんだろう……。

目を凝らす。

白く太い柱のようなものが空と地面を繋いでいる。

「ねえ、あれ何だと思う？」

友達に問う。

「え？ どこー？ 何も見えないよ」

三人が口を揃えて答えた。

柱はどんどんこちらに近づいてくる。

「ほら、こっちに来るよ。あれだよ、見えるでしょ？」

白い柱は渦を巻いている。竜巻だ。

「なに言ってんの？ なんにもないじゃん」

友達は呑気に笑っている。

「どうしてよ、巻き込まれるよ！ 逃げなきゃ！ Uターンして！」

私にしか見えないのか。

渦の中を物凄い勢いで回転しているガレキが確認できるというのに。

「バカなこと言わないでよ、もう少しで温泉着くよ」

友達は渦に向かって車を走らせる。

「ねえ！ ねえってば！」

渦がフロントガラスいっぱいに迫る。

もう、ダメだ……。

恐怖で身を硬直させた時、私は瞬間的に現実に戻ってきた。

「夢か……」

寝汗でパジャマがぐっしより濡れている。

ベッドから降り、荒い呼吸を整えながら服に着替える。

「怖かったあ……竜巻の夢なんて初めてだわ。どんな意味があるんだろう」

私はネットで「竜巻の夢」を検索した。

『大きな試練が迫っています。飛行機などのトラブルに気を付けましょう』

勘弁してよ……。

不吉な夢だったことに落胆しつつ、気分を変える為にテレビを付けた。

『雲がスカイツリーの先端を隠してますね。こんな時、竜巻が起こりやすいのでお気を付けください』

気象予報士の言葉に私は思わずフリーズする。

今日は、友達と飛行機で北海道の温泉に行く日だった……。

完

7.会いたい人がいるなら会いに行きなさい

「会いたい人がいるなら会いに行きなさい」

そんなこと言われても、相手の事情というものがある。

事情を知らなかった頃は、感情の赴くままに会いに行けた。

情熱の赴くままだった。

だが、今は事情が違う。

状況はますます複雑化している。

年も取った。

私も相手も無茶のできる年ではない。

暇が出来ても体を休ませる時間が必要だ。

その時間さえ、別の事情に埋め尽くされる。

私に割く時間があつたら、休んでもらいたい。

そうして会いに行くことを数日、数か月と伸ばしていく。

相手を思いやる振りをしているエゴだということもわかっている。

我が儘を言って相手に嫌われないようにしている、自分可愛さのエゴだ。

相手との対話の中から真意を読み取っているとわからせたいエゴなのだ。

結果、会いたいという気持ちに蓋をし、待つことを美德とする。

そうするには、長い間に蓄積された理由というものがあるのだ。

本当に会いたいのだろうか。

本当は、事情のせいにして一人でいたいと思っているのではないだろうか。

思考は現実化するという。

潜在意識が、だ。

顕在意識で「会いたい」と思っているとしても、潜在意識で「会いたくない」と思っていれば、それが現実化する。

会えない現実が目の前にあるということは、心の奥底では「会いたくない」と思っていることになる。

そうではないと信じたいが。

いや、絶対にそうではない。

会いたいのだ。無性に会いたいのだ。

臆病になったということか。

自己を制し、事情をすべて受け止められる器になったと思っていたのだが。

相手に求めず、自分を自分で満たすことのできる大人になったと思っていたのだが……。

完

8. 会いたい人がいたって会いに行けない

「会いたい人がいるなら会いに行きなさい？ 冗談じゃないわ。会いに行けるもんならとっくに会いに行ってるわよ。自分の前にシャッター降ろして、来るな光線を発してる人にどうやって会って言うのよ。シャッターを無理やりこじ開ける？ やったことあるわ。その時はうまくいった。でも、今は状況が違う。彼が抱えている問題は、その時の比じゃないの。私が行ったところで解決する問題じゃないの。気晴らしさせてあげたところで、彼の問題はまだまだ続くの。終わりが見えないの。下手したら、一生引きずるのかもしれない。私は彼の代わりにその問題を背負ってあげる事は出来ない。私じゃなくても、彼以外、背負う事は出来ない。だから、彼がシャッターを開けて出てくるまで、ここで待つしかないの。無理やり会いに行ったところで、空元気出されて、作り笑顔見せられるのがオチなの。それを見て安心する自分が許せないのよ。自己満足でしょ、そんなの。話を聞いてあげました、彼が笑顔になりました、はい、良かったですって、ただの自己満足。自分が安心したいだけの偽善。それがわかってるから行かないの。行けないのよ」

「そんなの勝手な思い込みなんじゃないの？ 彼はとっくに気持ちを切り替えて、ルーティンワークをこなしているかもしれない。確かに今は例年忙しい時期かもしれない。ただ、それだけのことなんじゃないの？ 彼はそんなに弱い人間なの？ 自分が下した判断で実行したことを悔やむような、そんな優柔不断な人なの？ 彼を信じていないの？ 彼がしたことは間違っていない、だから彼はちゃんと気持ちにケリをつけて、もう前を向いて歩き出してる、そう思えないの？

なんだか、寂しいわね。何年、彼と向き合ってきたのよ。十年よ、十年。彼のことを理解するには十分な時間なんじゃないの？」

「十年っていったって、ずっと一緒にいた訳じゃないし。彼は私に一面しか見せていないわ。本当の自分である時は一人である時だから。私には良い部分しか見せてない。十年で理解したって言ったら、その事ね。本当に堕ちた時の彼を私は見たことがない。こうだったんだってという過去の話としか知らない」

「自分で言ってるじゃない。『こうだったんだって過去の話』を彼は持ち直した時にしてくれるんでしょ？ 今回だってそうだと思えばいいのよ。仮に今、彼が生涯で最も堕ちていたとしても、必ず立ち上がれる人なのよ。今までよりずっと時間が掛かるかもしれないけど、必ず過去の話として、あなたに報告してくるはずよ。きっと立ち直った自分を見て欲しいと思ってる。それを待ってあげなさいよ、彼のことを本当に愛しているなら。待つのは行動派のあなたにとって拷問かもしれないけど、それでも待つしか方法はないんでしょ？ だったら、何カ月でも何年でも、彼が本当に笑顔になれるまで待ってあげるのが愛なんじゃないの？ 満たされるだけが愛じゃないの。ここでじっと信じて待ってあげることもりっぱな愛なの。それとも、待たされるのなんてもううんざりって見切りをつける？ どちらもあなたの自由よ」

完

9.二十年目の絆

声を枯らして泣いたところで状況が良くなるわけでもなく、私は寂しさに押し潰されそうになっていた。

彼の心が私から離れている…。

そう感じ始めてから半年が経った。

そんなことがあるはずがないと否定しながらも、私の心は少し強い風が吹いたら簡単に脆く崩れ落ちそうだった。

でも、どうしても彼との絆を信じていたかった。

今さえ乗り切れば、きっと元に戻れる……。

そう思い、どんなに心細くてもこの想いだけは断ち切れなかった。

そんな中、やらなくてはならない仕事が山積みで、私は無理やり自分を急ぎたてて働いていた。

ある日の帰宅途中だった。

朦朧とした意識のまま横断歩道を歩いていて、私は信号無視の車にひかれた。

即死だった。

あれから20年。

私は当時の年齢のままこの世に戻ってきた。

どうして戻ってきたのかはわからない。

気が付いたらここにいた。

ここは、彼と待ち合わせ場所に使っていた喫茶店だった。

私は店の入り口に近い丸いテーブルを選び、いつも座る椅子に腰掛け、

いつも頼んでいたカフェオレを若い男の店員さんにオーダーした。

店の中を懐かしく見渡していると、程なくカフェオレが運ばれてきた。

カップを置く手が私の視界に映った。

先ほどの店員さんよりも、年を重ねているような手だ。

私は何気なくその手の持ち主を見上げた。

男性は私と目が合った瞬間、動きを止めた。

しばらくお互いの顔を見合わせた後、我に返った男性が慌てたように笑顔を作った。

「あ、ごめんなさい。ちょっとびっくりしたものだから……」

その声を聞きながら、私も男性から目を逸らせなくなった。

「昔、好きだった女の子にそっくりなんです、あなた。忙しくてすれ違ってばかりで会えないでいたら、突然死んでしまって……。ずっと待っていてくれたことに安心して連絡しないでしたら、全く手の届かない人になってしまったんです。もっと大切にしていればよかったなんて、失ってから思っても遅いですよね…」

男性は昔の想いをしみじみと私に語った。

私は男性の目を見つめながら、溢れる涙を頬で感じていた。

20年前。

彼との絆は確かに存在していた。

私は今にして、ようやく心に安らぎを取り戻す事が出来た。

「大丈夫ですよ……大丈夫」

私は生きていた頃のように、言葉少なく彼にそう告げた。

完

10. 携帯電話

それは、骨董品屋の店先に、ひっそりと置かれていた。

『通話相手に本心を語らせる携帯電話です。ご自由にお持ちください。ご利用の際は、お持ちの携帯電話のICカードを入れてください。』

私は小さな紙切れに書かれていた文字に引き寄せられ、薄紫色の携帯を手を取った。

私には一緒に住み始めて5年経つ彼がいた。

彼は何も告げずに姿を消す癖があった。

彼は知人の家を点々とするらしい。

相手が女性であることも少なくない共通の友人が教えてくれた。

その度に私は、帰らない彼を恨む気持ちと信じたい気持ちに翻弄された。

神経をすり減らし、待つことに疲れ、彼の事を諦めようとする、それを見計らっていたかのようには彼は戻ってきた。

何事もなかったかのように、日常の生活を営み始める。

二人でいる時の彼は私にとっても優しい。

心と体を包み込み、私が抱えていた不安のすべてを消し去ってくれる。

二度と猜疑心を抱くまいと、決心させてしまう。

彼は、雲の上にいるような幸せと、真綿で首を絞める地獄の苦しみを私に与える。

天使にも刃にもなる。

私は気持ちの安定を持続させることが難しくなり、思考のすべてを彼に占領されるようになった。

挙げ句には、彼が私以外の事で楽しくしている事が許せなくなっていた。

そんなの、愛じゃない……。

一欠片残っていた理性が、相手を想うとはどういうことかを私に問いかける。

でも、何とかしないと、今の状態は永遠に繰り返される……。

そう思いながら彷徨い歩いていた時、この携帯に出逢った。

本心を知って、彼から距離を置くきっかけにしようと思った。

私は躊躇う気持ちと闘いながら11桁の数字を押した。

「どした？」

3回目の呼び出し音で彼が出た。

彼声を聞いても私は何も返せなかった。

最悪の話を聞かされるのだと覚悟しつつ、震えが止まらなかった。

すると、彼はこう言った。

「アヤ、早く帰っておいで。寂しい思いさせてごめんな。知り合いの家を端から廻って仕事をたくさんもらってきたよ。自営は大変だな。軌道に乗ったら結婚しよな」

この言葉で、全身の力が抜けた。

安心したのと同時に、彼を信じなかった自分を悔いた。

人が行き交う歩道の真ん中で、私は大声で泣いた。

完